

『日本仏教史Ⅲ 近世・近代篇』

冠

賢

一

本書は『日本仏教史』全三巻のうち、「古代篇」「中世篇」に続く「近世・近代篇」を収録している。本書の構成と執筆者は、近世篇が序説（柏原祐泉）、第一章「政治と仏教」（千葉乗隆）、第二章「仏教思想の展開」（柏原祐泉）、第三章「教団の構造」（森岡清美）に分かれ、近代篇は、序説（吉田久一）、第一章「明治維新の仏教」（圭室諦成・森岡清美）、第二章「明治期の仏教」（吉田久一）第三章「大正期の仏教」（森龍吉）、第四章「昭和前期の仏教」（藤谷俊雄）、第五章「現代の仏教」（松野純孝）となっている。

戦後、日本仏教史の研究は、狭い教義史・教団史でなく、広く文化的・社会史的視野から日本仏教の展開が論じられ、多彩な研究成果があげられた。しかし、近世・近代仏

教史の研究は、近世仏教が全般的に封建仏教として一括してとらえられ、さらには政権との妥協による形式化、墮落化と見て、せいぜい守勢時代と評価する考え方が根強く支配し、また近代仏教も廃仏毀釈以降の教団仏教は暗い谷間とされ、研究の興味と関心をひかなかつたために、古代・中世仏教史の研究に比較して著しい立遅れがあり、その研究は尚、不十分である。

そこで、最近の近世・近代仏教史研究の成果をふまえて、初めて近世そして近代仏教を通観して世に送ったのが本書である。先ず、近世仏教は「ひろく一般史的視点に立ち、一般史との接点において仏教の諸事象を把えなおし、もって、仏教の思想面なり、政治面なり、教団構造なりの諸現象を歴史のなかで正しく位置づけ」（十七ページ）る

ことよって近世仏教の独自性、その意義を明確にしようとしてゐる。このことは、仏教思想の展開を論じた第二章が、従来の近世仏教研究の中で最も進んでいる仏教ブローナーな宗学思想とその近世的展開に、それと近世一般思想との交渉、近世初期と末期のキリスト教と仏教の対決等がいかなされたかを、広い視点からもう一度見直して、その近世的意義づけをしようとしたように、新しい見解が処々に見られる。

また、近世仏教は寺請制、檀家制の上から与えられた宗教制度のなかで、宗教の本質的生成発展の姿を失った形骸化したものに過ぎないという見解が長い間認められてきた。しかし、最近の研究では、こうした面を肯定しつつも、その枠内で宗教を受容・荷担した民衆側の宗教生活に視点を置き、その展開の史的意義を認める見方が出されてきている。それは、近世は仏教が庶民のなかに沈着する時代であり、「庶民仏教の実態を明らかにすることは、仏教が国民生活に沈潜し土着化するもつとも具体的な姿態をするためばかりでなく、近代ないし現代の仏教の支えられている基底を明白にするためにも重要な意味をもっている」(一五五ページ)とするからである。特に、本章の「習俗的庶民仏教の諸形態」「救済的庶民仏教の展開」は、最近

の近世仏教研究の成果をふまえた新しい観点からの考察であり、今後の近世仏教史が開拓しなければならぬ多くの問題点を示唆してくれる。

次に、社会との関係を除いて教学や教団を説明することができない近代仏教史は、明治・大正・昭和のはげしい社会構造的変遷と思想・文化の推移の中で仏教をとらえる必要があるとし、一般史の流れの中で仏教をとらえるという方法をとっている。これは、近世篇の政治との関係、仏教思想の展開、教団構造上の問題の三本の柱に縦割りした構成と異にし、近代篇のこうした横割りの構成によって総花的な叙述に流れてしまったが、明治・大正・昭和期のはげしい推移のなかで、仏教がいかに展開していったかが明確にえがかれている。

最後に、本書の近世・近代篇の全体を通して感じられることは、近世・近代仏教史研究の中心となり、大幅な紙数が費いやされたのは真宗史関係であったということである。これは現在における近世・近代仏教史研究の状況を示すものにほかならず、いたしかたのないところであろう。しかし、これが近世・近代仏教史とするには少なからず異論のあるところであるが、ともあれ、本書は近世・近代を通して現代まで通観した最初の仏教史の研究書であり、ま

さに待望の書であったといえる。そこに示された鋭い問題点と、種々の創見は新しい仏教史研究の方向を打出してお

り、今後の近世・近代仏教史研究の基点となるものであらう。

— 昭和仏教全集 —

「仏教と平和」を読んで

遠 藤 教 温

昭和仏教全集の第三部九、藤井日達集として出された本書を読んで、大きな感動を受けたのは、一文一句からほとばしるような著者の信仰の気迫と情熱のすばらしさに触れることができたからである。

明治維新以来の日本の近代化は不幸にも常に戦争と結びついてきたが、その時代に出家し、正法弘通を志した著者の半生は、一言でいえば「撃鼓宣令」につきるといっていい。

本書に収録されている昭和四年から昭和四十年に至る各

文章が、それを余すところなく伝えている。日本山妙法寺山主藤井日達上人のひたすらな伝道生活の厳しさと八十何才かの今日、ますます燃えさかる信仰の熱情は文中に脈々と流れ、行間に溢れ出している。それはおそらく読む者の胸を打たずにはいけないであろう、そして読者自身に、仏教者がいかにあるべきかを問わずにはいない。

「私の今生一期の自行化他にわたっての南無妙法蓮華経は、まったくこの『撃鼓宣令、四方求法』の半偈の経文に尽きます。城邑聚落、いづくにても、相見る人々に対し、